

# 老舍研究会会報 第29号別冊

胡絮青女士 題字

## (老舍研究会第四代表委員) 日下恒夫先生「老舍関係著作・論文・翻訳・文章目録」

倉橋 幸彦編

### <日下恒夫与老舍

—— 从秘密的“老迷”经正統的“老迷”

到不純的正統迷 —— >

◇はじめて老舍という名前を耳にしたのは小学校時代。五年生のとき担任の先生からお聞きした記憶がある。あるいはNHK ラジオから流れてくる森繁久彌さんの『駱駝祥子』の朗読でその名前を耳にしたような気がする。それから十年後、大学で中国語を学び始めた年、老舍が作家代表団団長として来日していたことを新聞で知った。そこで『駱駝祥子』の日本語訳[☆这是 1943 年在日本出版的竹中伸先生の译本。(〈老舍与我〉)]を読み、中国語版では恩師の勧めで『離婚』を読んだ[☆我从大学毕业以来,再此阅读起老舍的作品。这次读的是中文版,而且读得也比较正规化了。我首次读《离婚》,这是为了学习北京话,在我老师太田辰夫的建议下。不知太田先生还记得此事否?但我的确以此为契机,开始下些工夫工夫收集老舍的作品。时为公元 1970 年。(〈老舍与我〉)]。あくまで北京語の勉強のためである。ところが、院生のころ学研で漢和辞典編纂のアルバイトをしていたことがきっかけで「老舍小説全集」の編纂に

加わることになり、その後、翻訳、解説、年譜や書誌の作成などすることになり、さらには論文めいたものやエッセイも書いたりするようになった。だが、あくまで自分は一ひりの老舍愛好家でありたいと願っていた、それが人さまの老舍研究で指導する立場になろうとは、まことに縁は異なるものである。(2014 年 2 月 3 日、吉田世志子著『老舍の文学』序)

◇“老舍の作品は、長いあいだ日本中の中国の教室で、いわば中国語(北京語)の教科書のように読まれてきました。古くは『紅樓夢』、そして『兒女英雄伝』を経て老舍の作品と続いてきました。日本で中国語を学んだ人で、もし老舍を 1 ページも読んでいない人がいれば、もぐりだと言っていいでしょう。”(2001 年 10 月 25 日「いつかは読みたい老舍」(『中国語をモノにするためのカタログ』)

□刚刚过了三十八岁生日的日下,肩上挎者一个精简的背包,中国话讲得漂亮极了。如果不看那递过来的名片,我无论如何也想不到他竟是一个日本人,而且是研究、翻译了那么多老舍作品的关系大学教授。(谢春彦〈“老舍迷”之路——日本关西大学日下恒夫教授印象记〉(《文学報》1984 年 5 月 31 日))

□五年前,舒乙告訴我,日本关西大学有个四十岁“中国通”日下恒夫教授,不但懂汉文,会说流利的北京话、上海话,还会满语、满文,是个奇才,外号“拼命三郎”。(赵大年〈日下恒夫教授〉(《北京晚报》1991 年 5 月 10 日))

【1980年】

「老舎と北京語(1)」

『中国語』(大修館書店)第240号、1月1日、  
講読、p12-13

◆老舎の死から／老舎の生平：(講読)「老舎四十自傳」\*く『明報』月刊第11期所載訳。原題「小型の復活(自傳之一章)」の「著者略歴」(312字)訳 p13

◇「老舎と北京語」と題するが、今回は北京語については触れず、老舎のことを、その死から説き起そうと思う。次回は、老舎と北京語のはなしと講読。最後は老舎と北京語を読み進めようとする人に対して、書物案内を兼ねたオリエンテーションの予定。(「はじめに」p12)

\*挿図：叶浅予「老舎花間构思図」

\*引用原文「著者略歴」の第一段最後尾に一箇所印刷ミスあり。「如是而已，再活四十年也許能有点出色[★出息]!」

「老舎と北京語(2)」

『中国語』(大修館書店)241、2月1日、  
講読、p12-13

◆北京語、老舎のことば／(講読)「『北京話語会汇』(1964年9月修訂再版)老舎序」(第一段・第二段全文訳) p12-13

「老舎と北京語(3)」

『中国語』(大修館書店)242、3月1日  
講読、p22-23

◆老舎を読むために

◇因みに日本では、十数年前までは仮にも中国語を学んだ者なら誰もが老舎の一部を読んだもの、中国語の世界では早くから老舎が“北京語”の教科書と見なされてきた感がある。それを苦々しく思う人もいるが、そのために老舎を読む人口が増えたことも事実。従って、日本の中国語学習研究史を語るとき、老舎は佚し得ない。ところで中

国語学研究会編『中国語學新辞典』(1969年光生館)のどこにもその名が見当たらずは、更にこの書が老舎を好み北京語辞典たる『岩波中国語辞典』や「老舎年譜」を作った倉石武四郎に捧げるためのものであったことをも想えば、不思議の最たるもの。(p22)

◇上述の故に、老舎はむしろ語学者と称されるべき人達によって、紹介や研究そして何よりも北京の口語土語であるが故に難解なことばそのものを読み取る基礎作業としての注釈が行われてきた。倉石武四郎、香坂順一、佐藤博、鳥居久靖、太田辰夫みなそうである。(同上)

【1981年】

「(解説)『駱駝祥子』について」

『老舎小説全集5 駱駝祥子・満洲旗人物語』(学習研究社、11月1日)p435-441  
→『老舎小説考』(自印、1983年) p1-7

「(解説)『満洲旗人物語——正紅旗下——』について」

同上、p441-448  
→『老舎小説考』(自印、1983年) p7-14

「『満洲旗人物語』関係系図」

同上、p449  
→『老舎小説考』(自印、1983年) p15

「(解説)『老舎の『短篇小説選』について」

『老舎小説全集6 老舎自選短篇小説選』(学習研究社、12月1日)p285-298  
→『老舎小説考』(自印、1983年)  
p17-30

【1982年】

「(解説)『張さんの哲学』について」

『老舎小説全集1 張さんの哲学・離婚』

(学習研究社、1月10日) p489-497

→『老舍小説考』(自印、1983年)

p31-39

「(解説)『離婚』について」

同上、p497-504

→『老舍小説考』(自印、1983年)

p39-46

「(解説)『馬さん父子』について」

『老舍小説全集3 馬さん父子・小坡の誕生日』(学習研究社、3月20日) p447-454

→『老舍小説考』(自印、1983年)

p47-54

『日本における老舍関係文献目録』

(倉橋幸彦と共編)

3月25日 自印 B4横判 19頁

\* 済南における第1回老舍学術討論会配布資料

◆ I 書誌・年表類／II 翻訳類／III 注釈類／IV 論文類

□ 从那八年以后，1982年3月我以这个目录[☆太田辰夫「老舍研究資料目録」(自印、16頁：油印、神戸外大中国文学特講資料)]为基础，开始编撰详细目录。这时从我的学生中也产生了个“老迷”，名叫仓桥幸彦，他与我合作。恰巧，同年我获得一次参加在济南开的第一届老舍学术讨论会的机会，喜出望外，便想把这份目录作为礼物带到中国去。但由于匆匆急救，自然难免有所遗漏。(〈我与老舍〉p216)

(口頭発表)「日本研究老舍的历史和现状」

4月 第一次老舍学術討論会

山東大学

□ 他和学生仓桥幸彦编成了囊括三百多篇论文的老舍研究目录，一九八二年四月，济南召开了中国第一次老舍学术讨论会，他就是在这项研究成果的基础上作了题为《日本研究老舍的历史和现状》的论文报告，一举引起中日学者的注目。他回忆起那次盛会，至

今还不胜依依。三面柳色一城湖的济南古城，老舍曾生活过、描写过；在这里，他也结识了许多热情友好的中国同行和老舍的夫人、子女。(谢春彦〈“老舍迷”之路——日本关西大学日下恒夫教授印象记〉(《文学報》1984年5月31日))

(翻訳)「私の一生」

『老舍小説全集7 火葬・私の一生』

(学習研究社、5月10日) p175(177)-263

□ 満州人は、満州語による文学を、ほとんど、残さなかったために、漢語で著した曹雪芹の『紅樓夢』や、文康の『兒女英雄伝』を含めて、満州文学、というのであれば、老舍の文学は、当然、中国現代文学の一翼を担う、現代満州文学であり、本書は、その場合、重要な位置を占めるに違いない。／本書の全集への組入れに努力し、美しい日本語にされた、編集委員でもある訳者の炯眼と語学力とに、あらためて、敬服したい。(尾崎実「文学部助教授 日下恒夫ほか編訳「老舍小説全集」」(『関西大学通信』120号、1982年6月15日))

「(解説)『私の一生』について」

同上、p273-280

→『老舍小説考』(自印、1983年)

p55-62

「正統的老迷から不純な正統迷に」

『翻訳の世界』(日本翻訳家養成センター)第7巻第9号、9月1日、p13-14

(翻訳)「猫の国」

『老舍小説全集4 猫の国・牛天賜物語』

(学習研究社、10月1日) p1(3)-208

□ 关于《猫城记》，似乎无须多言，而我在哪里却还有必要谈谈它。这里要谈的还难免有“揭露”之嫌，也就是说，我要公布一下这部作品是怎样收入日文版《老舍小説全集》的。其实，在编辑工作刚开始时，计划里并没有《猫城记》。后来讨论编辑计划，我坚

决主张，无论如何也得把这部作品加进去，也可以说当时我很固执。不少人不同意我的意见，他们的主张是：老舍本人对这部作品既然作了“绝版宣言”，那么我们外国人何必……。当然这种考虑在当时的中国国内是妥当的，正因为如此，人民文学出版社《老舍全集》编辑计划书才特意注明对《猫城记》采取不采用的方针。但是，也正是因为中国不予出版，而且是因为我们是外国人，才应该选入日本人编的《全集》里面去。如果不这样，那么，《老舍小说全集》在外国出版的意义就减却了一半。我所持的理由，与这部作品有没有问题一事，毫不相干。对我来说，文学史中怎样评价这部作品都可以。我只感到《猫城记》这部作品作为小说，是一部颇为有趣的作品，也是读起来其乐陶陶的作品。因为对这部作品感兴趣的读者，毋宁说西欧比东方更多，所以在老舍的全部小说当中，《猫城记》被译成西欧各国语言的次数和版本也很多。正在这个时候，日本别的出版社出版了这部作品的日文版，而且中国报刊上对这部作品也作出了评论。真是机缘凑巧，适逢其会，我的主张通过了，于是作出翻译《猫城记》的决定。（〈我与老舍〉p217）

□同时，关于《猫城记》，我听到更令人欣喜的消息。1983年春第二次访华时，听说中国正在考虑把这部作品也纳入《老舍全集》的出版计划。据说这是考虑到外国友人的意愿的结果……。（〈我与老舍〉p219）

□山野博史「老舍小説全集第四卷」（『関西大学通信』第122号、1982年6月15日）

「(解説)『猫の国』について」

同上、p 449-458

→『老舍小説考』（自印、1983年）

p 63-72

(翻訳)「《猫城記》初版本〈自序〉」

同上、p 451

(翻訳)「《猫城記》再版本〈新序〉」

同上、p 452-453

「(解説)『牛天賜物語』について」

同上、p 458-466

→『老舍小説考』（自印、1983年）

p 72-80

(翻訳)「私はどのように『牛天賜物語』を書いたのか」

同上、p 459・460-461・461-462

【1983年】

『老舍書誌——日本編』（倉橋幸彦と共編）

3月23日 自印 B4横判 31頁

◆目次 | I 書目・年表類 / II 翻訳類 / III 注釈・課本類 / IV 論文類

□翌年3月再次访华，我又把目录加以补充送到中国研究家们的手里。这时改题为《老舍书志——日本篇》。所以标上“日本篇”三字，那是因为当时我们手里拥有几百张书目卡片，其中包括中国的和欧美的，我们想据以编成“西欧篇”和“中国篇”。但是，两年三次访华，与许多位中国老舍研究家聚谈，得知四、五年来他们研究的现状后，逐渐认识到编撰“中国篇”，不应由我们外国人来越俎代庖了。（〈我与老舍〉p216）

→1984年3月17日 B6横判 増補36頁

(翻訳)「四世同堂 第三部——飢荒——(うえ)」

『老舍小説全集10 四世同堂(下)』

(学習研究社、4月5日) p 3(5)-351

\*英訳 Yellow Storm からの佚篇十三章分を含む。

□《饥荒》对我来说也是一部忘不了的作品。大家都知道它是《四世同堂》的第三部。原定由一位先生担当翻译工作，但由于某种情况，改变由我担当了。1984[★1983]年4月我第一次访华归来，刚校完《我这一辈子》，又连忙边翻译《猫城记》边撰写几篇解说文，并预定下一步利用暑假编写《老舍年谱》。

正在这个时候，突然听到让我翻译《饥荒》。我愕然了，想干脆谢绝掉。但出版社说除我之外没有人译。于是我毫无自信地勉强应承下来。（《我与老舍》p219）

□我只好暑假前赶紧译完《猫城记》，然后以半年时间赶完了新的任务。说实在的，这半年当年除了写三、四篇短文之外，真是夜以继日地把一切力量全投入了《饥荒》里。白天译中文那部分，下半夜到天亮写《年谱》——作为《四世同堂》下卷的附录。我几乎终日埋头于在原稿纸上填字的“作业”。我写些这样琐事，会使人们认为我在这里诉苦。的确，我几次在中途想罢休，但**既然说干，就该干到底**。工作还是贯彻到底了。（《我与老舍》p220）

□〈玩命精神〉（赵大年）

□在北京，他发现刊载于《十月》的《四十同堂》的第三卷佚文十三章，令他兴奋不已；这样一来，正在日本翻译出版的《四世同堂》就可以真正凑得上全璧了。他匆匆赶回东京，向日本编译《老舍小说全集》的学研出版社报告这个消息。他告诉：“学研社的社长很热心于老舍作品的出版，一九八〇年我被邀为翻译《老舍小说全集》的三个委员之一。《四十同堂》第一、二卷由前辈芦田、竹中两位先生译了，第三卷便让我来接替下去，几个月要译完，时间十分紧迫。因此，八二年底前的几个月对我来说是够紧张的。我白天译前面的中文，晚上译后面英文的十三章，早晨则着手《老舍年谱》和论文的编写，每周又得校对印稿，一天只能睡五个来小时，但值得庆幸的是我终于完成了任务，次年三月书就印出上了书店的架子。当我随第二次日本老舍著作爱好者代表重到贵国，捧着新书送到中国同行手中的时候，心理的高兴就甭提了！”（谢春彦〈“老舍迷”之路——日本关西大学日下恒夫教授印象记〉（《文学報》1984年5月31日））

□尾崎実「『老舍小説全集 第十巻』」

（『関西大学通信』129、1983年6月17日）  
「(解説)破鏡再び合う——『四世同堂』の末尾の消失と英語抄訳本からの重訳について——」

胡絮青・舒乙／日下恒夫訳注

同上、p 353-371

◆一、完全なものか／二、作者は書き上げた／三、老舍は多忙な人／四、謎は残る／五、この婦人はわれわれの友だ／六、百章そろった|注31条366-369／補注369-370  
→『老舍小説考』（自印、1983年）  
p 81-99

「老舍年譜」

同上、p 375-497

◆上段：年号と満年齢／中段：伝記事項および作品／下段：関連事項

□本巻付録の「老舍年譜」「老舍著者目録」も訳者である関西大学助教授日下恒夫先生の縮年の労作で、**今後の老舍研究に大きな足跡をのこしたといえましょう**。翻訳との同時進行という困難な作業を果された先生のご尽力に厚く感謝申し上げます。（『老舍小説全集月報10』3月、編集室から、  
p 11

→1983年 自印本

□「ところで、私は学研版の「年譜」の中で、一九三四年のところに、「春のうちに、猫の小球が駆け落ちする。」という一行を入れておいた。真面目な研究者ならこんなことを書き入れるはずはない／中略／であろうが、いわば一種の遊びを試みたのである。もちろん根拠はあって、老舍の『老舍幽默詩文集』の序文の最後に「舍猫小球昨與情郎同逃（我が家の猫「たま」が先日いい男と駆け落ちした）とあるのによって書いたのである。**冗談は遊び、遊びは人生の潤滑油**とまで考えたわけでもないが、こっ

りこんなエピソードも入れておいたのである。／だからのちに私の年譜が中国で出版される話があり、その中国語訳の原稿を読まれたせいであろう、胡絮青さんや家族の方々から、「お前の年譜の中でいちばん面白いところは、猫の駆け落ちの箇所だ」と言われたときは、猫も注意しないだろうと思っていただけに、ちょっとうれしかった。」（「猫と老舎と豆汁兒と — 胡絮青さんのことなど」2001年11月5日、p2-6）

「老舎著書目録 付 中・短篇小説一覧」

同上、p498-511

◆老舎著書 101点 498-508／付録 中短篇小説 71点 508-511

→1983年7月 自印本

「(老舎年譜・老舎著書目録)あとがき」

同上、p512

→1983年7月 自印本

◇本年譜と目録は極めて短時間のうちに作成したものであり、しかも途中から生じた翻訳に伴う時間不足のため、当初の予定より簡略なものにならざるをえなかった。とはいえ、一応の形をととのえられたのは、もとより先学の成果によるところが多い。これまで年譜の名を冠したものは大小あわせて十篇九種。先駆的な成果を別にすれば、一九七八年の同時期に発表された伊藤敬一、杉本達夫両氏の二種が出発点となった。ことに杉本氏の年譜は、学習研究社版『世界文学全集 45』の付録であるが、その「老舎解説」とともに当時の最新の情報（生年もその一例）によった簡にして要をえたものである。書店に並ばぬ本であるためというより、翻訳の「解説・付録」を採録しない文献目録の「悪癖」のため世人の注目を集めなかったと思われるので特に触れておきたい。もっとも、七九年以降、老舎に関する文章の公表数の多さは諸先学の頃とは

比較にならない。それらのみでも作業は遥かに容易となった。今回の作成目的は、現在までに判明している事実と成果を、ともかく一覧できる形に整理することに置いたので、推測は最低限度とした。……また、ここ両三年のあいだに発表された成果のうち、ことに『老舎研究資料編目』を参照しえたのはありがたかった。数年前より同学たちと書誌作成準備のために集めていた手元の資料（その一斑は不完全ながら『日本における老舎関係文献』に示した）といくつかの出入りはあるものの、信頼度も高く、日本では知られていないので、編者未見の初出資料を該書に依拠したものも多いことをお断りしておく。編者に謝意と敬意を表するとともに、いささかの資料を加えたことを幸いとする。

「愛着—老舎の四つの短篇—」

陳慧敏／日下恒夫訳述

『老舎小説全集月報 10』（学習研究社、3月）p1-4

◇この論文は、はじめ陳慧敏が英文でタイプに打ったものを、日下恒夫が約三分の二に縮め、両者の討論を経たのち、このような形に仕上げたもの。現代は、To love Something is to die for it—Four Short Stories by Lao she—（p104）

→『老舎小説考』（自印、1983年）

p101-104

（翻訳）「日本人の心の中に生きる老舎 —

日本語版『老舎小説全集』の刊行を祝して」

胡絮青・舒乙／日下恒夫訳

同上、p8-11

→『老舎小説考』（自印、1983年）

p106-109

『老舎小説考』

自印 1983年 B6判 109頁

\*学研版『老舎小説全集』所収の「解説」

10 篇と「月報」掲載1篇を纏めたもの。  
 \*発行年月日の記載はないが、編者が恵送賜った一本の署名日付は、「1983年6月29日」。また、頁数を印したもう一本の日付は、「1984年7月」。日下先生は復旦大学への一年間の在外研究をされるに当たって、これを“名片”代わりにするつもりで作成されたと編者は記憶する。

『老舎年譜 老舎著書目録——付中・短篇小説一覽』

自印 1983年 B6判 140頁

\*『老舎小説全集10 四世同堂(下)』所収の「老舎年譜・老舎著書目録」。

\*発行年月日については同上。

<1984年>

(口頭発表)「老舎と西洋文化——从《猫城记》谈起」

4月25日 青島 第2次老舎學術討論会口讨论会上的第二天,日下作了题为《老舎と西洋文化——从《猫城记》谈起》的学术报告,散发与会者手中的提纲和《老舎书志——日本篇》,是他自己亲手用刚劲整肃的中文刻印的。在这油墨的清香中,听着他条理清晰的阐述,从《猫城记》的写作到版本的考稽,以及对书中所谓“毁灭的手指”的详尽论证,都令人感到他为此所付出的艰辛劳作和材料占有的丰富。最后他用“从猫(《猫城记》)经牛(《牛天赐传》)到骆驼(《骆驼祥子》)”这句话作结,以概括老舎创作的发展过程,实在是有点老舎式的幽默的。(谢春彦<“老舎迷”之路——日本关西大学日下恒夫教授印象记>《文学報》1984年5月31日))

□日下氏の発表を聴けなかったのは残念だが、筆者が原稿の一部を瞥見させて貰った記憶では、《猫城記》の十一章の始め「毁灭的手指」の一節と、旧約ダニエル書の第五章 finger's of a man's hand の一節を

引用した、比較文学的な論証を中心としたものようであった。／老舎の著作の中には、折々19世紀英国小説を始めとする西洋文学の残響が聞[☆]えて来るような処があり、作家老舎の形成に西洋の文学・思想との交渉はなかなか重大な意味を持つと思われるが、それは彼の作品の濃厚な民族性に蔽われて目立たない。比較文学的方法の適用は老舎研究に於ては有用であるに違はなく、日下氏の発表は聴衆の関心を惹いたことであろう。事実、上海の文学報5月17日号は日下氏の紹介記事を大きく載せ、この発表を称賛しているのである。(藤井栄三郎「日本側の発表」(『老舎研究会会報』第2号、1984年12月10日、p3))

『日本における老舎関係文献目録』

(倉橋幸彦と共編)

9月1日 日下恒夫発行/朋友書店発売  
 B6判 66頁

◆まえがき3頁/凡例2頁/目次1頁|I 書目・年表類/II 翻訳類/III 注釈・課本類/IV 論文類

◇「まえがき」:私たちは、1982年3月、済南で開催された第1回老舎學術討論会における配布資料として、はじめて簡単な日本における老舎関係文献目録を作成したのち、翌年3月にはかなりの資料を加え、『老舎書誌——日本編』と改題し、また本年3月にはその増補版を作成してきた。／必要な人にはコピーして配布するようなこともあったものの、あくまで自分たちの心覚え用に作成したものである。だが、この種のもは、不充分とはいえ公にすれば、少しは役に立つかもしれないと考え、たまたま私たちが一年間、上海と北京に赴くのを機会に、このような形でとりあえず公にすることにした。／なお、中国では二度にわたり、老舎に関する目録書誌の試行本が「内

部発行」として出版（うち一種は日本でもリプリントあり）されているが、さらに外国における文献を含む、詳細を極めた書誌を公刊すべく、すでに原稿も完成、印刷を待つばかりである。私たちの手元にも中国と外国における文献カードがある程度集まってはいるが、中国における公刊も間近であると思われるので今回の目録にはそれらを収めないことにした。／ただ、今回のこの目録は、目に入った限りの文献に取捨選択を加えず羅列したものである。このように何もかも同様に羅列する書目作成の方法は、考えようによっては「有害」ですらあるのかもしれないと思いはじめている。私たちは今回できる限り文献の現物を集めるという作業を続けながら、老舎という作家の日本における読まれ方、研究のされ方に、ある「特殊性」を感じているからである。／老舎に関する限り、日本で発表された文章は、数の多さに反し、研究のステップとなりうるものは、残念ながら、必ずしも多いとはいえない。そして、これが日本における老舎の読まれ方のひとつの現われであるのかもしれない。

【1985年】

#### 「老舎『猫城記』と聖書」

1948年8月 写于上海 12月改稿

『關西大學中國文學會紀要』第9号、壺井義正先生退休記念特輯、3月25日、  
p143-153

（口頭発表）「（口頭発表）『文博士』について」

7月20日 名古屋大学  
第2回老舎研究会大会

#### 〈老舎——在美国生活的时期〉

石垣綾子、夏姮翔（日下恒夫）译  
《新文学史料》85年第3期、8月22日、

p157-160

\*原文：石垣綾子「老舎—アメリカにいたころ」（『美しき出会い—回想の18人』ドメス出版、1983年11月25日）

#### ◆在雅斗(Yadoo)的相遇 / 苦难的季节 / 向着解放的祖国

◇译者附记：当我作这篇文章的翻译工作时，承蒙杨震宇同志的热情的启迪和帮助。在此，向他表示谢意。（p160）

→郝长海、吴怀斌编《老舎年谱》（黄山出版社、1988年9月）附録一、p229-234

◇（原载《新文学史料》1985年第3期，选用时作了一些删节）（p234）

→舒济编《老舎和朋友们》（生活·讀書·新知三联书店、1991年10月）p622-629

→张桂兴编《老舎评说七十年》（中国华侨出版社、2005年7月）钩沉、p173-178

→张桂兴编《老舎评说七十年（中卷）》（中国华侨出版社、2010年1月）p189-195

#### 「老舎のもうひとつの著作

##### ——『言語声片』の話——

『老舎研究会会報』第4号、12月15日、  
p1-4

◇いったん自分のものになった本は、根[★金]輪際他人には与えたくない、それどころか見せるのもいや、というのが世の愛書家の癖。それなら私は愛書家として落第生ということになってしまう。できたばかりの現代文学資料館を北京西郊に訪ねたとき、おりから開催中の老舎展覧会を見ることができた。そこに陳列されていた多くの本や関係資料のほとんどは老舎の家族の提供になるものであるが、聞けば、あの豊富胡同（どうでもいいことだが、私は昔の豊富胡同という名称が好きだ）の、庭に二本の柿の木がある老舎の故居が、近く老舎記念館になるとのこと。そこには老舎の著作が常時展観に供せられることであろう。老舎の



在英時代の「著作」として、『言語声片』ももちろん並べられるに違いない。それなら、そこに展示される著作は、いうまでもなく複製品や再版本でなく、重厚な皮表紙の初版本こそが相応しい。しかも、記念館になる予定の家にはそれがない。そこで、本の身になって考えてみた。考えるまでもなく、わが家の雑然とした書架に並んでほこりを被っているよりも、北京にいるほうが晴れがましい気分を味わえるというものだ。かくして、この本も、私の手元にあったのは一か月あまり、六月末の暑い日、上海から北京へ嫁して行ったのである。(p4)

◇<追記>この文章は、雑誌『書林』（上海文芸出版社）編集部の依頼によって書いたエッセイ「老舍の另一本著作——談靈格風課本《言語声片》」〔☆未見〕を、二、三の箇所に入手を入れはしたが、ほぼそのまま日本語に書き改めたものである。(同上)

□一旦得到了一本书，就无论如何也不愿给别人，甚至不愿拿出来让人看看，这是世上有的“爱书家”的怪癖。果真那样的话，那么我已不配作个“爱书家”了。前几个月，我到北京西郊新建成的现代文学资料馆去参观了刚开幕的老舍展览会。那里陈列的许多书和有关资料，大多都是老舍家属提供的。那时，听说老舍的故居——在那个丰富(原名叫丰盛，我喜欢丰盛这个名字)胡同里的、院子里有两棵柿子树的故居，在不久的将来要变成老舍纪念馆。那么，我想，在纪念馆里将陈列的老舍居住英国时期的“另一本著作”——《言语声片》，该不是重版本或复制品，而应是皮面厚重的初版本。再想，对我在沪相逢的这本书本身来说，与其被放在我家乱七八糟的书架上蒙上一层灰尘，还不如说让它到北京去独自尝到那种隆重的滋味儿。于是乎，它在我手边停留了一个月，便从上海传嫁了北京。(1985年1月写与上海)

\*この漢語原文は疑いなく日下先生の手になるものです。しかし上では『書林』掲載分は〔☆未見〕と記しているではないですか。不可思議としか言いようがないが、この間の事情——“这可是个秘密。”

□他还是个**细心人**，几年前在上海的旧书店里买到了一本《灵格风汉语声片》，竟然是老舍二十年代在伦敦为“灵格风语音学院”录制汉语声片时出版的文字对照教科书，共30课，都是老舍写的、讲的。此事国内无人知晓，老舍家人也一无所知。为了缅怀老舍先生，日下恒夫特意将这个珍本送给了老舍家人。待到从英国、日本寄来转录的录音磁带时，全家人一听，喜出望外，对呀，是老舍的口音，一口纯正的北京话。只是音调稍高一点，当时老舍还是个二十多岁的青年嘛。

#### <关于满族旗人故事《正红旗下》>

胥敏译

《满族文学研究》(辽宁)第3期、1985年、p147—152

\*「(解説)『滿洲旗人物語——正紅旗下——』について」の中訳。

◇「作者简介」：日下恒夫：(Kusaka Tsuneo 1945 生) 广岛县人，神戸市外国语大学中国学科毕业。曾再东京都立大学大学院修博士课程，中途退学，担任该大学人文学部助教，现任关西大学文学部教授。大学院时代曾师事太田辰夫教授，攻读中国语和中国文学。在太田辰夫教授，攻读中国语和中国文学。在太田教授的影响下，有志于研究中国八旗文学。一九八四年在上海复旦大学任教并进行学术考察。(p147)

◇〔本文译自日下恒夫《老舍小说考》〕(p152)

◇〔注〕：日下先生的文章末尾，附有《满族其人故事》关系系谱图。这对日本读者有很大的帮助，但对中国读者作用不大，故此省略。——译者(同上)

【1986年】

〈老舍与西洋——从《猫城记》谈起〉

《复旦学报（社会科学版）》1986年第6期、  
11月20日、p36—39

\*「1984年4月20日から30日にかけて中国青島で開催された第2回「老舍学術討論会」において報告したとの発表」「要旨」

◇（本文发表时，本刊略有删节）（p39）

→张桂兴编《老舍评说七十年》（中国华侨出版社、2005年7月）争鸣、p256—264

→张桂兴编《老舍评说七十年（中卷）》（中国华侨出版社、2010年1月）p278—287

〈老舍与我〉

《世界纪实文学（第二辑）》1986年11月、河南人民出版社、作家·作品、p211—220

\*「本刊有删节」

□日下恒夫，男，1945年11月生于日本广岛县。现为关西大学中文系教授。编著有《老舍小说考》、《老舍年谱》等；翻译老舍小说《猫城记》、《我这一辈子》、《饥荒》；编辑《老舍小说全集》日本版十卷。（p211）  
◇世人称《红楼梦》的爱读者为“红迷”，那么仿此，我这样的人就是个“老迷”了。/现代文学作家当中，拥有一批称为“迷”的读者的。（p212）

◇当时，除了几位好友之外，没人知道我是老舍爱好者。在六十年代后半期到七十年代前半期，我要是公开谈老舍，就会遭到几位“进步”分子的嘲讽。现在还记得很清楚，当日本报纸上登载老舍死亡的时候消息时，“进步分子”当中也有的说：咎由自取，理所当然。当时我只好作个秘密的“老迷”。（p215）

◇现在回忆起我在大学的四年“教室生活”中，虽然接触过些中国文学的原文书，但似乎没见过老舍的原文书。至于此事，考虑一

下日本人学习中国语的历史，我不禁感到一件极其不可思议的事。原来，日本从明治九年（1876）正式开始学北京语，并且开始把《红楼梦》、《儿女英雄传》当作北京语课本来读。与此一样，从1945年前后开始把老舍的作品当作课本来读，尤其是在1950年以后，几乎每本中国语课本都选录了老舍的作品。可是，由我开始学中国语的1965年起，直到我读完研究生院的1973年这样想当长的一段时间里，老舍从日本的中国语世界里消失了。（p214）

◇1974年春天，我已经二十八岁了。我从东京回到大阪，作为教员登上关西大学的讲台。在搬家之际，我端详了自己书架上的书，才知道老舍的书居然达到了可观的数量。对此我自己也吃了一惊。原来，当时中国已经长期以来没有出版老舍的作品（不只是老舍作品）了，因此我们能弄到手的只能是香港等地印行的翻印版（日语称之为“海贼版”），或者是旧书店里的价格十分昂贵的珍本书。我一看书架，一边作如是想：我手里既然收藏了这么多的老舍作品，难道不可以把这些作为“资料”（这个词儿多么可憎！）也来“著书立说”吗？产生这种心理也可能符合自然规律，而不配作“老迷”。（p215）  
◇当上教师以后，我的立场也与学生时代不同了。我可以堂堂正正地讲起老舍，谈起老舍，以老舍的作品当教材了，而且多年已成惯例。（p215）

【1988年】

「老舍と西洋に関して

——從「猫」經「牛」到「駱駝」——

『中文研究集刊』（中国文学研究会）創刊号、  
12月15日、p65—83

◆正文|注13条p81—83

◇《注》（1）：本稿は、1984年4月20日か

ら30日にかけて中国青島で開催された第2回「老舎学術討論会」において報告したときの発表原稿の一部、および「老舎小説全集」第4巻「猫城記・牛天賜伝」（学習研究社 1982.10.1）のために書いた解説文「『牛天賜伝』について」をもとにしながら、大幅な加筆と訂正を施したものである。（p81）

【1989年】

「ある噂

— 竹中伸『駱駝祥子』をめぐる —  
『老舎研究会会報』第8号、3月1日、  
p2-4

「対」という考え方

— 老舎長編小説への覚え書き —

『關西大學中國文學會紀要』第10号、芝田稔・山口一郎両先生退休記念特輯、3月20日、p142-156

◆正文|注13条 p154-156

◇以上の小説群をながめると、面白いことに気が付く。それは発表の年代順にそれぞれの作品が二作ずつ一対になっているに違いないと思われることである。上にあげた小説を対になるものとして発表の年代順に分けてみると、次のような七組のペアができる。／(A)組：『老張的哲学』—『趙子曰』／(B)組：『二馬』—『小坡的生日』／(C)組：『大明湖』—『猫城記』／(D)組：『離婚』—『牛天賜傳』／(E)組：『駱駝祥子』—『選民(文博士)』(?)／(F)組：『火葬』—『四世同堂』／(G)組：『鼓書芸人』—?〔☆『方珍珠』〕

◇注(1)本稿は、一九八四年四月二四日から三〇日にかけて中国の青島で開催された第二回「老舎学術討論会」において報告したときの発表原稿の一部分に大幅な加筆と訂

正を施したものである。また、そのときの発表要旨は「老舎与西洋 — 从《猫城記》谈起」と題して『復旦学報(社会科学版)一九八六年第六期』(上海、復旦大学、一九八六・一一・二〇)に掲載されている。

(口頭発表)「『猫城記』の評価をめぐる」

7月15日 中京大学(八事学舎)

第6回老舎研究会大会

「小説家老舎 — 『猫の国』から — 」

『季刊中国研究』(中国研究所)16号、9月、  
p88-105

◆正文|注11条 p104-105

【1990年】

(口頭発表)「『四世同堂』は本当によみがえったのか」

6月23日 中京大学(八事学舎)

第7回老舎研究会大会

【1991年】

「1991年春、北京 — 祥子の道と

老舎の原風景 — 」(倉橋幸彦と共著)

『老舎研究会会報』第11号、7月15日、  
p4-8

◆はじめに／瑞雪／語る一三つの座談会／見る、聞く／会う、食べる／帰国のあとで

「事務局だより」

署名：夏

同上、p8

◇事務局の怠慢により会報の発行が遅れたことをお詫びします。また諸般の事情により今回はワープロ原稿を版下にしました。これまでより見にくいかも知れませんが、時間と経費の節約を考えてのこととご了承ください。(p8)

【1992年】

「老舎と北京 — あるいは老舎の北京 —」  
『しにか』(大修館書店)第3巻第3号、  
3月1日、p44-50

「(コラム)茶館」

同上、p35

『文献目録(稿)』

— 主要是從1984年後半到現在 — 』

(倉橋幸彦と共編)

1992.8. 21~8.25 於北京

自印 A4判 16頁

\*首届國際老舎學術討論會8月23日における倉橋幸彦「近十年以來日本老舎研究簡介」報告配布資料

◇此目録的採録範圍是從1984年後半到現在。關於1984年以前日本人或在日本發表的文献，請參看《日本における老舎關係文献目録》(日下恒夫、倉橋幸彦編，1984)。此書雖然已絕版，但去年在中國出版的大作《日本研究中國現代文學論著索引1919~1989》(孫立川、王順洪編，1991.8，北大出版社)里的〈老舎部分〉(P.185~212)實際上是拙作的中文版，還加上一些資料，可以作參考。

◆目次/1 総論類(事典、書誌等)/2 翻訳(老舎作品)/3.1 論文(文學方面)/3, 2 論文(語言方面)/3.3 有關文献的翻譯/4 課本・注釈類/5 其他|<參考>:[付録1]中山時子編『老舎事典』(大修館書店刊)内容/ [付録2](日本)老舎研究会大会的記録/ [付録3]『老舎小説全集』全10卷(學習研究社刊)内容

(口頭発表)「老舎 — 北京の作家」

11月20日

大阪府立文化情報センターホール

第32回泊園記念講座

【1993年】

(翻訳)「私の老舎論(訳稿)」

千里駱駝会訳(日下恒夫監訳)

7月23日 A4判 10頁

◆“珠”、砕ける/自立した社会批判者/「狂喜」の中の地滑り/覚醒と知識分子  
\*第10回老舎研究会における倉橋幸彦「王氏論文をめぐって」(紹介)報告の配布参考資料

\*原題:王行之「我論老舎」(『文芸報』1989年1月21日)

「老舎 — 北京の作家」

『泊園』(泊園記念会)第32号(9月20日)  
p35-74

\* [資料一]「著者略歴」(老舎「小型の復活(自伝の一章)」/ [資料二]「老舎略年譜」/ [資料三]「『駱駝祥子』訳書目」/ [資料四]「学研版『老舎小説全集』内容一覧」/ <付>「北京を知るための極略目」

【1996年】

「一九九五年読書アンケート第三回」

『中国図書』(内山書店)第8巻3月号、  
3月1日、p5

\*柴垣芳太郎『老舎と中日戦争』・牛島徳次『老舎『駱駝祥子』注釈』に言及

「老舎“The Drum singers”(鼓書芸人)について」

『關西大學中國文學會紀要』第17號、  
3月19日、p13-28

【1998年】

「老舎のペンネーム」

中山時子編『老舎事典』(大修館書店、12月20日)コラム、p530

「老舎とリングフォン」

同上、p 547

【1999年】

「[ことばのエッセイ]

“你好”に関する三つの疑惑」

中国語コミュニケーション協会編『TECC mate 《交流》 JIAOLIU』（ベネッセコーポレーション）第3号、9月30日、p2-3

◆你好??/你好!!

\* “你好”が「中国製の……の、歴史ある言葉」であることを証明する一例として、『茶館』第2幕の一段を引く。

【2000年】

「二〇〇年読書アンケート（第三回）」

『中国図書』（内山書店）第13巻第3号、3月1日、p10

\* 『老舎文学詞典』・『老舎之死探訪実録』を取り上げる。

【2001年】

「二〇〇一年読書アンケート」

『中国図書』（内山書店）、3月1日、p5-6

\* 傅光明・鄭実編著『太平湖的記憶——老舎之死』（海天出版社、2001年）と張桂興編著『老舎研究叢書』（中国国際広播出版社）を取り上げる。

（口頭発表）「アメリカから帰った老舎」

7月26日 早稲田大学 老舎研究会

「膨大と細心の「老張的治学」——

張桂興《老舎究叢書》を吹聴する——」

『老舎研究会会報』第15号、7月27日、p10-12

◇思えば私もかつて「老舎小説全集」（学

研）で年譜作成を試みた。はじめは先人の成果を譲り受け形ばかりの追加を加えれば一丁上がりと考えていたが、仕事を始めてみると先行する参考資料は皆無、本当に何もなかった！今となれば嘘のような話だが、そんな年譜が83年から数年のうちはもっとも詳細な年譜だったのだ。その後、資料や事実の発見、発掘、発表が驚嘆すべき速さで進み、あっという間にわが作品は「過時了」、お役御免。実は中国で出版する話があり翻訳も出来上がっていたのだからお断りした。もう15年も昔の話。（p11）

◇そんな二十年昔と比べて、今の老舎研究者や愛好者はなんと幸せか、この叢書を手にしさえすれば老舎の事跡に関して研究現況が把握できるのだ。（同上）

◇ところで、日本でもこれまで多くの老舎に関する研究発表が行われてきたが、それには老舎研究会の存在も大きい。一作家の研究会がこれほど長く続いているのは慶賀すべきことである。しかしいささかの不満もなかったわけではない。老舎の生涯や研究史に関する知識がかならずしもみんなに共有されているとは限らなかったのだ。なかには唯我独尊式研究発表のあったことも否定できない。これはなにも日本人にのみ言っているのではない。（同上）

◇さて、何ごとにつけ資料というのは、**収集は面倒、整理は厄介、さらなる困難は公刊**。それにもかかわらず、かかる仕事を継続する氏の精神をどう呼べばいいのか。ひたすら研究のため、人のために尽くす飽くことなき収集と調査への邁進ぶりは、私たち誰もが知っている言葉でいえば「舍予精神」の発露というのがふさわしい。なによりもまず私たちは、氏のこの徹底した研究態度と一連の仕事にたいして、深い感謝と敬意を示さなければならない。（p12）

◇ただ《年譜》のような書物は、時の経過とともにいつかは過去のものになるという宿命がある。いかに徹底、綿密な仕事でも人のすること、不足や勘違いはありうる。読者とりわけ若い人たちは、この巨冊をじゅうぶん批判的に熟読し、錯誤を正し、不足を補う努力を続けるべきである。そうすることが、氏の学恩に対する最大の感謝というものだからである。(同上)

◇といいながら、実は私はまだじゅうぶんにこれらの叢書のすべてを熟読、精査したわけではない。巨冊の群れを前に、今はもう圧倒されているばかりなのである。なのに大いに吹聴する気になったのは、年譜、評伝、資料考釈といった基礎的で地道な仕事に対して、世の研究者と称する人々がやや冷淡であるように思えるからである。もっとも、そういう人に限って、こっそり部屋の中で有用な箇所を、みずからの研究に供するべくメモにとっているに違いないのだ、それなら大いに称えるがよい、声を極めて誉めればいい。(p12)

(題詞)「博搜文字求甚解、辛勤輯佚思舍予」

同上、p12

\*「「労働模範張桂興」の奮闘ぶりに感心し」た一句。

「いつかは読みたい老舎」

『中国語をモノにするためのカタログ』

[アルク地球人ムック 2002 年度版] (アルク、10月25日、p76-77)

「猫と老舎と豆汁児と」

— 胡絮青さんのことなど

『東方』(東方書店)第249号、11月5日、p2-6

◆「豆汁児」を飲む／猫の駆け落ち

◇胡絮青さんとはじめてお会いしたのは、一九八一年のこと。学習研究社から老舎小

説全集が出版されるのを記念して、長男の舒乙氏をともない日本に来られたのだ。私は一日宴席に加わっただけであるが、そのとき何を食べたかも覚えていないくらいだから、たぶん端っこのほうで緊張していただけだったのであろう。ただ、その席で中山時子先生が「老舎の旅」を発案されたことだけは覚えている。翌年、その旅に参加させていただいた。そして一九八二年の春、生まれてはじめて中国に足を踏み入れた。

(p3)

◇それまで書物でしか知らなかった北京でぜひとも実現させたいことがあった。その第一は「豆汁児」(トウチアル)を飲んでみることである。その希望を出したものの、胡絮青さんはもとより、どなたもそのようなものは飲む必要はないと言われる。そもそも豆汁児など昔の最下層の人間の口にするもであって、「外賓」(こんなことばがあった時代)に飲ませるようなものではない。そもそも今では北京ではだれも飲まないし、若い人は見たこともないとか。そんな話を聞くと、ますます飲んでみたくなるのが人情。／よほど私が固執したのであろう、ついに豆汁児と対面することができた。後で聞いたところによると、退職している老師傅を呼んで作ってもらったという。／さあ、来た！食欲をそそる色ではない。独特の発酵臭をかいでみた。ちょっと後悔の念がよぎった。だが、ずいぶん無理を言って注文したもの、飲み干さないといけない。／飲んだ！味はどうか。それは言わぬが花というもの。とにかく飲んだのだ。ほかの人はまともに一杯を飲みきった人はいなかったと思う。みんなの呆れ顔をよそに、私は三杯も飲んだのだ。なぜ、そんなに豆汁児のようなものにこだわったのか。それにはわけがある。(p3-4)

◇七十年代の後半から、私は老舎小説全集付録の「老舎年譜」の作成にあたっていたが、当時は老舎関係の資料の入手は困難、できの悪い晨光版を古本屋で見つけても大喜びしていたような時代だった。先行する年譜はあまりにも簡単なものしかない。仕方なく老舎の書いたエッセイをカードにとりながら年譜の骨格作りを始めていたときであった。そんなころ老舎に関する文章を連続的に『明報』という雑誌に発表してきた胡金銓という人がいた。氏の文章からずいぶん多くのことを教えられた。この胡氏は本職が映画監督で、自らの書を「外行挿嘴」と自任されているのであるが、そのところがまたゆかしく、すっかりファンになってしまった。その本格的「老舎迷」の著書の「不成問題的問題」と題するけっさくな序文にこんなことが書いてあったのだ。(p4)

◇老舎研究を志す諸公は、まず「豆汁児」を飲む練習をされてはいかが。／これでは、どうしても飲まないといけないではないか。そうは思っても、豆汁児なるもの知らない。日本でも探せばどこかにあったのかもしれないが、それほど熱心でもない。いつしか豆汁児のことも忘れたころ、上記の旅となったのである。以来、ほそぼそながら老舎に関する文章を書いたりしているのも豆汁児のおかげであるにちがいない。(同上)

□前几年，听说不敢喝豆汁的就不算地道的北京人。因此他一口气儿就喝了三大碗豆汁，就辣咸菜丝儿，喝得满头大汗，痛快极了，那滋味儿至今难忘。(赵大年〈日下恒夫教授〉(《北京晚报》1991年5月10日))

【2002年】

### 「老舎『四世同堂』と“The Yellow Storm”への覚え書き」

関西大学文学部 中国語中国文学科編『文化事象としての中国』関西大学出版部、3月31日) p293-314

◆はじめに／一 『四世同堂』／二 “The Yellow Storm”／三 末尾の削除|注11条 p312-314

【2003年】

### 「破鏡「尚未」重圓——老舎“The Yellow Storm”末尾の重訳された中国語への覚え書き——」

『關西大學中國文學會紀要』第24號、3月19日、p23-42

◆0. はじめに／1. 瑞全の苦悩と葛藤／2. 戦争と原爆／3. 日本と日本人／4. <加紅線>のサブリミナル効果／5. まとめ——何が行われたか——|注12条 p40-42

### 「老舎研究会の生まれる少し前」

『老舎研究会会報』第17号、8月1日、p1  
◇[蛇足]この会は、老舎読みやら老舎好きが年に一度相集い、いわゆる玄人素人の別なく、自由気ままに老舎とその周辺について語り合う会です。設立のきっかけから考えてみても、研究会というより愛好会の名が相応しいかもしれません。そのほうが純な感じがしませんか。／そこで、会の運営も単純素朴にまいます。なにしろ老舎は北方民族の出身、ここでは単純素朴はほめ言葉。専家の研究ばかりでなく、時には遊び心を盛り込んだり、いっそ真面目に勉強会というのも悪くないでしょう。／とはいえ、発足当時の若者もみな今では中年また熟年。最近、遊び心や単純さをお忘れなのでは？この会もまた同じ、もっと新しい血を注ぎ込みたいものです。

「事務局便り」

署名なし  
同上、p 12

【2004年】

「“多”、“少”、“快”、“硬”の人

— 傅光明さんのこと —

『老舎研究会会報』第18号、7月31日、  
p 1-4

◆ “多” / “少而快” / “硬” [[付]: 「傅  
光明先生編著略目」 p 3-4

「事務局便り」

署名なし  
同上、p 16

【2005年】

「老舎のアメリカ時代

— 『鼓書芸人』覚え書き —

『關西大學中國文學會紀要』第26號、  
3月19日、p 1-11

◆ 正文 | 注5条 p 10-11

◇ 「注4(p 10)」: 日下恒夫「老舎 “The  
Drum Singers (鼓書芸人)” について」(『關  
西大學中國文學會紀要』、1996年3月)。な  
お、その文章の終わりに「待読」と書いて  
しまったので、遅きに失するが拙文をその  
続篇とする。

【2014年】

「(『老舎の文学』)序」(2014・2・3)

吉田世志子『老舎の文学 — 清朝末期に生  
まれ文化大革命で散った命の軌跡』(好文出版、  
3月15日)4頁

<後記>

日下恒夫は、何よりも伝統を重んじる。

先生が検証したように日本における老舎研  
究は「むしろ語学者と称されるべき人達によっ  
て、紹介や研究そして何よりも北京の口語土語  
であるが故に難解なことばそのものを読み取る  
基礎作業としての注釈が行われてきた」。

先生の老舎研究は、1980年の「老舎と北京語」  
にはじまり、2008年3月の博士学位論文「北京  
語と老舎の総合研究」で一応の完結を見ている。  
これだけを見ると先生は正に「語学者」として  
老舎の「紹介や研究」に励んだ研究者である。

しかし実は、四十前という若さで学研『老舎  
小説全集』の編集に加わることにより、「学問  
の越境」にためらいながらも、老舎の翻訳、解  
説、論文、年譜・書目、はたまた随筆を次々と  
公にされたのである。

先生の饒舌とユーモアは誰もが認めること  
であろう。また、先生は大胆かつ細心、筆法は  
辛辣でありながら、情の人でもある。そして何  
よりも仕事をとことん極める(“玩儿命精神”)  
学問の人、同時に教育者でもある。

それらのことを、この拙い「おしゃべり目録」から  
読み取っていただければこれに勝る喜びはない。

こんなおしゃべりに付き合う時間的余裕の  
ない方には、せめて本誌第15号掲載の「膨  
大と細心の「老張的治学」——張桂興《老舎研  
究叢書》を吹聴する——」だけでもご一読を「吹  
聴する」次第。

人が他人を評価する場合、自分にはない部分  
を見出し、そこに敬意を払ったり羨望したりする  
ということもあろう。しかし、やはり自分に近い  
者にこそ共感を示し、そこに自己を投影するとい  
うのが人の常であるからである。 —編者

老舎研究会会報 第29号 別冊  
2015年9月12日 老舎研究会